

2025 年度（令和 7 年度）
卒業生に対する
学修成果に関する調査報告

令和 8 年 9 月
志學館大学 学務委員会
志學館大学 I R 室

1. 趣旨

学生が本学での4年間の学修の成果をどのように受け止めているかを調べるために、2025年度（令和7年度）卒業者全員を対象に、アンケート調査を実施した。

本学のディプロマ・ポリシー（以下、DPという。）とそれに基づくカリキュラムは、2018年度入学者より大幅に改定された。今回対象とした卒業生は、1年次からすでにスタートしていた新カリキュラムの下での教育を受けた学年であり、見方を変えると新カリキュラム5期生ということになる。なおこの間、各種IR報告をもとにした現行教育課程の検証結果を踏まえ、2023年度入学生からは、共通教育と専門教育の接続性を特に意識した新たな教育課程（当面の間、新新カリキュラムと呼ぶ。）がスタートしている。従ってこの新新カリキュラムの検証作業は、完成年度である2026年度以降に行うことになる（2026年度卒業生を含め、これ以降の卒業時アンケートが該当する）。

本報告において、特に断りのない場合、[]内の数値や記述は、卒業生に対して実施した過去の同様の調査（以下「2024調査」「2023調査」「2022調査」「2021調査」「2020調査」「2019調査」「2018調査」という）における値を示し、同順で直近のものから表記してある。

2. 資料と調査方法

アンケートの設問は14項目とした。これらの項目は、今回の調査対象である2025年度卒業生（2022年度入学生）の入学時のDPを基に6つのカテゴリーに分けられるので、DPカテゴリーと対応させて以下に示す。これらの項目は、2018調査以来、変えていない。このDPは、巻末に付録として示してある。2023年度にDPの改定を行われており、これに対応する形で、2024調査から設問は2つの設問（Q4とQ14）が修正されている。

- | | |
|-----|-----------------------------|
| DP1 | Q1. 個性的かつ堅実な人間性、自主性、創造性 |
| DP2 | Q2. 人類の文化、社会と自然に関する教養 |
| | Q3. 物事を科学的に、論理的に考える方法や力 |
| | Q4. コンピュータの操作方法や情報技術 |
| | Q5. コミュニケーションの能力 |
| | Q6. 自ら学ぶことが楽しく、喜びであると感じる姿勢 |
| DP3 | Q7. 専門分野や所属する学科の専門知識や技能 |
| | Q8. 総合的な問題発見能力や課題を解決する能力 |
| DP4 | Q9. 仕事や働くことの意味についての自分自身の考え |
| | Q10. 生涯にわたって学習を続けていく意思や力 |
| DP5 | Q11. 倫理観 |
| | Q12. 地域社会の発展に貢献したいという気持ちや意識 |
| DP6 | Q13. 多様な言語・社会・文化に対する理解 |
| | Q14. 多様な人々と共生・協働できる素地 |

各項目について、「大学でのさまざまな学修によって、設問の能力や知識を身につけたと感じているか」を問い、「4. 大変身についた」、「3. 身についた」、「2. 少しは身についた」、「1. 身につかなかった」の4つの選択肢から回答を求めた。

調査は、ユニバーサルパスポートシステムを用いて行った。なお、卒業式の日までに未回答であった者を対象として、付加・補完的に紙ベースの追加調査も行ったことに変更はない。

3. 分析結果

3.0 回答者の属性

評価対象者（卒業生）は312 [319, 362, 335, 312, 295, 270, 256] 人（大学院除く）で、回答率は、93% [98%, 96%, 98%, 93%, 90%, 84%, 89%] であった。未回答者は21名であった（表1）。学科ごとの回答率は、心理臨床学科（以下、心臨）91% [99%, 96%, 99%, 94%]、人間文化学科（以下、人文）98% [100%, 98%, 98%, 100%]、法律学科（以下、法律）92% [95%, 95%, 98%, 89%]、法ビジネス学科（以下、法ビ）96% [98%, 98%, 98%,

90%] であった。

回答の方法は学科間でやや相違はあるものの全体では、69% [86%, 74%, 84%, 82%, 80%] がユニパを通じて行っており、データ収集の方法としては妥当であった判断できる。ただし、これまでの割合から見ると低い値となっており、今年度は学生へのアクセス方法としてユニパで行う困難さがみられたと考えられる。

これに対応して、紙ベースによる回答割合が高くなり、20% [14%, 20%, 15%, 11%, 10%] (心臨 14% [14%, 20%, 17%, 8%, 10%], 人文 18% [3%, 9%, 4%, 16%, 2%], 法律 33% [21%, 18%, 18%, 9%, 12%], 法ビ 24% [14%, 40%, 14%, 19%, 16%])、無回答は7% [2%, 4%, 2%, 7%, 10%] 21名であった(表1(補足))。紙ベースでの回答は、心臨以外は増加しており卒業式での声掛けが重要な年度であった。

各学科及び学士課程全体(以下「全学」という。)の学生の回答の平均値、標準偏差、最頻値を表2～15に示す。なお、以下の結果を理解するために、すべての回答の平均値は3.24

[3.27, 3.24, 3.15, 3.12] であったことに留意されたい。回答の平均値が上がり、それを維持している。

表1 調査対象及び回答者の数

学科	対象学生数	回答者数	回答率 (%)
心理臨床	124 [133, 135, 134, 127, 111, 105, 97]	113 [131, 130, 132, 120, 104, 103, 80]	91 [99, 96, 99, 94, 94, 98, 82]
人間文化	57 [58, 64, 57, 57, 52, 46, 40]	56 [58, 63, 56, 57, 48, 40, 37]	98 [100, 98, 98, 100, 92, 87, 93]
法律	86 [84, 118, 101, 97, 87, 75, 68]	79 [80, 112, 99, 86, 75, 49, 62]	92 [95, 95, 98, 89, 86, 65, 91]
法ビジネス	45 [44, 45, 43, 31, 45, 44, 41]	43 [43, 44, 42, 28, 38, 31, 39]	96 [98, 98, 98, 90, 84, 70, 95]
合計	327 [319, 362, 335, 312, 295, 270, 246]	291 [312, 349, 329, 291, 265, 226, 218]	93 [98, 96, 98, 93, 90, 84, 89]

表1(補足) 学科別の回答方法の比較 (%)

学科	ユニパ	紙	無回答
心理臨床	77 [85, 76, 81, 87, 84]	14 [14, 20, 17, 8, 10]	9 [2, 4, 2, 6, 6]
人間文化	81 [97, 89, 95, 84, 90]	18 [3, 9, 4, 16, 2]	2 [0, 2, 2, 0, 8]
法律	59 [75, 77, 80, 79, 75]	33 [20, 18, 18, 9, 12]	8 [5, 5, 2, 11, 14]
法ビジネス	71 [84, 58, 84, 71, 69]	24 [14, 40, 14, 19, 16]	4 [2, 2, 2, 10, 16]
合計	69 [84, 77, 84, 82, 80]	20 [13, 20, 15, 11, 10]	7 [2, 4, 2, 7, 10]

3.1 個性的かつ堅実な人間性，自主性，創造性（Q1）

この設問は、本学の建学の精神に関連するもので、DP1に関連する（表2）。全学平均は3.4 [3.3, 3.3, 3.2, 3.2, 3.2, 3.0] で、今回最も高い設問の1つであった（他にはQ6, Q7, Q11）。前年度の全学平均3.4から変化はなく、高い水準を維持している。学科別平均は3.3～3.4で、学科間の差は0.1ポイントと小さい。法ビは平均3.3、最頻値は3・4であり、回答に若干の幅がみられた。年度末データで行っているDP達成度の評価は、各DPに割り振られた科目の積算単位数で行っているが、DP1はDP2～DP6を束ねて評価するという形にしている。このためこの設問は、DP1を直接的に扱う数少ない機会の1つであり、学生の獲得実感といった観点から今後も注視していく必要がある。

表2 Q1に関する統計的代表値

Q1	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.74)	3	3.1(.86)	3	3.2(.81)	3
人間文化	3.0(.76)	3	3.2(.59)	3	3.4(.65)	4
法律	3.0(.71)	3	3.3(.66)	3	3.3(.78)	4
法ビジネス	3.0(.79)	3	3.2(.76)	3	3.2(.64)	3
全学	3.0(.74)	3	3.2(.77)	3	3.2(.75)	3

Q1	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.72)	3	3.2(.79)	3	3.3(.69)	3
人間文化	3.1(.74)	3	3.4(.75)	4	3.2(.68)	3
法律	3.3(.70)	3	3.4(.61)	3	3.4(.71)	4
法ビジネス	3.2(.63)	3	3.2(.77)	4	3.4(.62)	4
全学	3.2(.71)	3	3.3(.74)	3	3.3(.69)	3

Q1	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.4(.64)	3, 4	3.4 (.68)	4		
人間文化	3.4(.75)	4	3.4 (.68)	4		
法律	3.3(.70)	4	3.4 (.69)	4		
法ビジネス	3.3(.69)	4	3.3 (.68)	3, 4		
全学	3.4(.68)	4	3.4 (.68)	4		

3.2 人類の文化、社会と自然に関する教養（Q2）

この設問は、主に教養教育あるいは共通教育に関連するものである（表3）。なお、人間文化学科では、専門教育全体とも関連していると見なせる。

全学での平均値は3.2 [3.2, 3.2, 3.1, 3.1, 3.1, 3.1, 2.9] で、最頻値は4であり、学生は教養を概ね身につけたと認識していることがうかがえる。前年度の全学平均3.2から変化はなく、評価は同水準で推移した。学科別平均は3.2～3.3で、学科間の差は最大0.1ポイントと小さい。全学平均は2018年度の2.9から上昇し、2023年度以降は3.2で安定している。

表3 Q2に関する統計的代表的値

Q2	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値
心理臨床	2.9 (.75)	3	2.9 (.83)	3	3.0 (.85)	3
人間文化	3.1 (.89)	3	3.1 (.76)	3	3.4 (.67)	4
法律	2.8 (.75)	3	3.3 (.71)	3, 4	3.1 (.69)	3
法ビジネス	2.8 (.76)	3	3.2 (.72)	3	2.9 (.74)	3
全学	2.9 (.77)	3	3.1 (.79)	3	3.1 (.77)	3

Q2	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値
心理臨床	3.0 (.73)	3	3.0 (.79)	3	3.1 (.77)	3
人間文化	3.3 (.73)	3	3.4 (.75)	4	3.3 (.60)	3
法律	3.1 (.71)	3	3.1 (.72)	3	3.4 (.76)	4
法ビジネス	3.1 (.81)	3	2.9 (.75)	3	3.4 (.65)	4
全学	3.1 (.74)	3	3.1 (.77)	3	3.2 (.73)	3

Q2	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値
心理臨床	3.2 (.77)	3	3.2 (.75)	3		
人間文化	3.3 (.83)	4	3.3 (.74)	4		
法律	3.2 (.77)	3	3.2 (.86)	4		
法ビジネス	3.3 (.79)	4	3.2 (.71)	3		
全学	3.2 (.78)	4	3.2 (.77)	4		

3.3 物事を科学的に、論理的に考える方法や力（Q3）

全学での平均値は3.2 [3.2, 3.3, 3.2, 3.1, 3.1, 3.1, 3.0] で、最頻値は3であり、学生は当該能力を概ね身につけたと認識していることがうかがえる（表4）。全学平均は前年度と同値である一方、最頻値は4から3へ変化しており、評価の中心に変化がみられた。学科別平均は、法律および法ビが3.3、心臨および人文が3.1で、最大0.2ポイントの差が認められた。ただし、前年度比では心臨が0.1ポイント低下し、法ビが0.1ポイント上昇している。

表4 Q3に関する統計的代表値

Q3	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.0(.86)	3	3.0(.80)	3	3.1(.86)	3
人間文化	3.1(.88)	3	3.2(.75)	3	3.1(.79)	3
法律	3.0(.86)	3	3.3(.62)	3	3.2(.77)	3
法ビジネス	3.0(.84)	3	3.1(.83)	3	3.1(.71)	3
全学	3.0(.85)	3	3.1(.77)	3	3.1(.80)	3

Q3	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.77)	3	3.2(.80)	3	3.2(.70)	3
人間文化	3.0(.78)	3	3.2(.90)	4	3.2(.79)	3
法律	3.1(.71)	3	3.2(.71)	3	3.4(.70)	4
法ビジネス	3.3(.66)	3	3.1(.71)	3	3.3(.69)	3
全学	3.1(.78)	3	3.2(.78)	3	3.3(.72)	4

Q3	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.77)	3, 4	3.1(.74)	3		
人間文化	3.1(.83)	3	3.1(.75)	3		
法律	3.3(.75)	3	3.3(.71)	4		
法ビジネス	3.2(.82)	4	3.3(.64)	3		
全学	3.2(.78)	4	3.2(.73)	3		

3.4 コンピュータの操作方法や情報技術 (Q4)

全学での平均値は3.0 [3.1, 3.0, 3.0, 3.0, 2.9, 3.0, 2.9] で、最頻値は3であり、学生は当該能力を概ね身につけたと認識している(表5)。前年度の全学平均3.1からは0.1ポイント低下しており、特に心臨では3.2から3.0へ0.2ポイント低下した。一方、法律は3.0から3.1へ上昇している。2025年度の学科別平均は3.0～3.1で、学科間差は小さい。全学平均は2018年度以降2.9～3.1の範囲で推移しており、継続的な向上傾向は確認できない。

表5 Q4に関する統計的代表的値

Q4	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.0(.79)	3	2.9(.78)	3	3.1(.77)	3
人間文化	3.1(.74)	3	3.0(.82)	3	3.1(.78)	3
法律	2.9(.87)	3	3.0(.82)	3, 4	2.8(.89)	2
法ビジネス	2.8(.87)	2	3.1(.70)	3	2.7(.65)	3
全学	2.9(.82)	3	3.0(.78)	3	2.9(.80)	3

Q4	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.0(.79)	3	3.0(.80)	3	2.9(.74)	3
人間文化	3.1(.79)	3	3.2(.77)	4	3.1(.71)	3
法律	3.0(.82)	2	2.9(.82)	3	3.1(.85)	4
法ビジネス	3.0(.88)	3	3.1(.66)	3	3.2(.77)	3
全学	3.0(.81)	3	3.0(.79)	3	3.0(.79)	3

Q4	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.72)	3	3.0(.74)	3		
人間文化	3.1(.71)	3	3.0(.83)	3		
法律	3.0(.86)	2, 3	3.1(.75)	3		
法ビジネス	3.1(.71)	3	3.0(.77)	3		
全学	3.1(.76)	3	3.0(.76)	3		

3.5 コミュニケーションの能力 (Q5)

全学の平均値は、3.3 [3.3, 3.3, 3.2, 3.2, 3.2, 3.2, 3.1] で、最頻値は4であり、学生は当該能力を概ね身につけたと認識していることがうかがえる（表6）。全学平均は前年度と同値で、高い水準を維持している。学科別平均は、人文と法律が3.4、心臨と法ビが3.3であり、学科間の差は最大0.1ポイントと小さい。前年度比では、人文が0.2ポイント上昇した一方、法ビは0.1ポイント低下した。

表6 Q5に関する統計的代表値

Q5	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.80)	3	3.0(.87)	3	3.0(.90)	4
人間文化	3.2(.78)	3	3.2(.71)	3	3.4(.84)	4
法律	3.0(.85)	3	3.6(.64)	4	3.4(.76)	4
法ビジネス	3.1(.90)	4	3.2(.67)	3	3.2(.65)	3
全学	3.1(.82)	3	3.2(.80)	4	3.2(.83)	4

Q5	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.77)	3	3.2(.80)	3	3.3(.80)	4
人間文化	3.1(.75)	3	3.2(.88)	4	3.1(.85)	4
法律	3.2(.81)	4	3.3(.69)	3	3.4(.70)	4
法ビジネス	3.2(.83)	4	3.1(.88)	3, 4	3.3(.71)	4
全学	3.2(.78)	3	3.2(.79)	4	3.3(.77)	4

Q5	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.76)	4	3.3(.79)	4		
人間文化	3.2(.80)	4	3.4(.75)	4		
法律	3.3(.79)	4	3.4(.75)	4		
法ビジネス	3.4(.66)	4	3.3(.73)	3, 4		
全学	3.3(.76)	4	3.3(.77)	4		

3.6 自ら学ぶことが楽しく、喜びであると感じる姿勢（Q6）

全学の平均値は3.4 [3.3, 3.3, 3.2, 3.2, 3.3, 3.1] と、最頻値は4であり、学生の自己評価は概ね高い水準にある（表7）。全学平均は前年度の3.3から0.1ポイント上昇した。学科別では法律が3.5と最も高く、心臨が3.4、人文および法ビが3.3であり、最大0.2ポイントの差がみられた。前年度比では法律が0.3ポイント、人文が0.1ポイント上昇した一方、他の2学科は横ばいであった。

表7 Q6に関する統計的代表値

Q6	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.84)	4	3.2(.78)	3	3.2(.76)	3
人間文化	3.2(.89)	4	3.3(.73)	4	3.4(.67)	3
法律	3.1(.76)	3	3.4(.73)	4	3.2(.75)	3
法ビジネス	3.2(.79)	3	3.1(.93)	4	2.9(.77)	3
全学	3.1(.81)	3	3.3(.78)	4	3.2(.75)	3

Q6	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.70)	3	3.3(.79)	4	3.2(.78)	3
人間文化	3.2(.78)	3	3.3(.77)	4	3.3(.76)	4
法律	3.3(.76)	4	3.3(.67)	3	3.4(.72)	4
法ビジネス	3.1(.77)	3	3.1(.78)	3	3.3(.73)	3
全学	3.2(.74)	3	3.3(.75)	3, 4	3.3(.75)	4

Q6	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.4(.68)	4	3.4(.72)	4		
人間文化	3.2(.80)	3	3.3(.80)	4		
法律	3.2(.80)	4	3.5(.71)	4		
法ビジネス	3.3(.67)	3	3.3(.73)	3, 4		
全学	3.3(.73)	4	3.4(.74)	4		

3.7 専門分野や所属する学科の専門知識や技能 (Q7)

全学の平均値は3.4[3.4, 3.4, 3.3, 3.3, 3.2, 3.3, 3.2] で、最頻値は4であり、学生は専門知識や技能を概ね身につけたと認識していることがうかがえる(表8)。全学平均は前年度と同値で、高い水準を維持した。学科別では、心臨が3.5と最も高く、法律3.4、人文3.3、法ビ3.1であり、最大0.4ポイントの特徴的な差がみられた。前年度比では、心臨と法律が0.1ポイント上昇した一方、人文は0.1ポイント、法ビは0.2ポイント低下した。

表8 Q7に関する統計的代表値

Q7	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.72)	4	3.2(.76)	4	3.2(.83)	4
人間文化	3.0(.82)	3	3.3(.72)	3	3.4(.74)	4
法律	3.2(.75)	3, 4	3.4(.73)	4	3.1(.85)	3, 4
法ビジネス	3.1(.83)	4	3.3(.78)	4	3.0(.72)	3
全学	3.2(.77)	3	3.3(.74)	4	3.2(.81)	4

Q7	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.70)	4	3.3(.75)	4	3.3(.69)	4
人間文化	3.2(.71)	3	3.4(.80)	4	3.5(.62)	4
法律	3.2(.75)	3	3.3(.71)	4	3.5(.70)	4
法ビジネス	3.3(.60)	3	3.1(.84)	4	3.4(.59)	3, 4
全学	3.3(.71)	3	3.3(.76)	4	3.4(.67)	4

Q7	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.4(.66)	4	3.5(.63)	4		
人間文化	3.4(.65)	4	3.3(.64)	3		
法律	3.3(.75)	4	3.4(.67)	4		
法ビジネス	3.3(.67)	3	3.1(.79)	3, 4		
全学	3.4(.69)	4	3.4(.67)	4		

3.8 総合的な問題発見能力や課題を解決する能力 (Q8)

この設問は、課題発見・解決型教育やアクティブラーニングに関連するものである (表 9)。

平均値は全学では 2.7 [3.2, 3.2, 3.2, 3.1, 3.1, 3.1, 3.0] で、最頻値は 2 であり、学生の自己評価は前年度までと比べて低い水準となった。前年度の全学平均 3.2 から 0.5 ポイント低下し、全学の標準偏差も 0.72 から 0.98 へ拡大していることから、評価の低下に加えて学生間の認識の差が大きくなったことがうかがえる。学科別平均は 2.6~3.0 で、法律学科が約 3.0 と比較的高い一方、人間文化学科は 2.6 であり、最大約 0.4 ポイントの特徴的な差がみられた。

表 9 Q8 に関する統計的代表的値

Q8	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	2.9(.75)	3	3.0(.76)	3	3.1(.81)	3
人間文化	3.0(.83)	3	3.1(.74)	3	3.2(.69)	3
法律	3.1(.78)	3	3.4(.69)	3	3.1(.88)	3
法ビジネス	2.9(.79)	3	3.3(.58)	3	3.1(.69)	3
全学	3.0(.78)	3	3.1(.73)	3	3.1(.79)	3

Q8	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.70)	3	3.1(.76)	3	3.1(.68)	3
人間文化	2.9(.66)	3	3.2(.89)	4	3.1(.75)	3
法律	3.2(.68)	3	3.2(.67)	3	3.4(.66)	4
法ビジネス	3.2(.77)	3	3.0(.85)	3, 4	3.4(.61)	3
全学	3.1(.70)	3	3.2(.77)	3	3.2(.69)	3

Q8	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.76)	3	2.7(.95)	2		
人間文化	3.3(.75)	4	2.6(.93)	2		
法律	3.3(.65)	3	2.97(1.03)	2, 3		
法ビジネス	3.3(.70)	3	2.7(.95)	2		
全学	3.2(.72)	3	2.7(.98)	2		

3.9 仕事や働くことの意味についての自分自身の考え (Q9)

この設問は、主にキャリア教育及び職業観の涵養に関連するものである（表 10）。平均値は、全学では 3.3 [3.3, 3.3, 3.3, 3.2, 3.3, 3.2, 3.1] で、最頻値は 4 であり、学生は職業や勤労に対する自身の考えを概ね形成できていると認識していることがうかがえる。全学平均は前年度と同値で、2023 年度以降 3 年連続して 3.3 を維持している。学科別では、法律が 3.5、法ビが 3.4、心臨および人文が 3.2 で、最大 0.3 ポイントの特徴的な差がみられた。

表 10 Q9 に関する統計的代表値

Q9	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.83)	3	3.1(.83)	4	3.2(.86)	4
人間文化	3.1(.88)	3	2.9(.84)	3	3.3(.69)	3, 4
法律	3.1(.85)	4	3.6(.61)	4	3.4(.67)	4
法ビジネス	3.3(.85)	4	3.4(.66)	3, 4	3.3(.69)	3
全学	3.1(.84)	4	3.2(.79)	4	3.3(.76)	4

Q9	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.84)	4	3.2(.85)	4	3.3(.70)	3
人間文化	3.0(.88)	3	3.2(.89)	4	3.2(.85)	4
法律	3.3(.86)	4	3.4(.63)	3	3.4(.74)	4
法ビジネス	3.3(.82)	4	3.1(.83)	3, 4	3.4(.66)	4
全学	3.2(.85)	4	3.2(.79)	4	3.3(.74)	4

Q9	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.80)	4	3.2(.79)	4		
人間文化	3.2(.78)	3	3.2(.87)	3, 4		
法律	3.4(.65)	4	3.5(.71)	4		
法ビジネス	3.4(.67)	4	3.4(.66)	4		
全学	3.3(.75)	4	3.3(.78)	4		

3.10 生涯にわたって学習を続けていく意思や力 (Q10)

この設問は、生涯学習能力の涵養に関連するものである（表 11）。平均値は、全学で 3.3 [3.3, 3.3, 3.2, 3.2, 3.1, 3.2, 3.1] で最頻値は 4 であり、学生は継続的に学ぶ意思や力を概ね身につけたと認識していることがうかがえる。全学平均は前年度と同値で、2023 年度以降 3 年連続して 3.3 を維持している。学科別では、法律が 3.4 と最も高く、心臨 3.3、人文 3.2、法ビ 3.1 であり、最大 0.3 ポイントの特徴的な差がみられた。前年度比では法ビが 0.2 ポイント低下している。

表 11 Q10 に関する統計的代表的値

Q10	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.85)	3	3.2(.80)	3	3.2(.83)	4
人間文化	3.1(.88)	3	3.3(.75)	4	3.3(.68)	3
法律	3.0(.86)	3	3.4(.67)	4	3.2(.81)	4
法ビジネス	3.2(.94)	4	3.2(.78)	3	3.1(.71)	3
全学	3.1(.87)	4	3.2(.76)	3	3.2(.78)	3

Q10	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.74)	3	3.2(.80)	4	3.2(.71)	3
人間文化	3.1(.72)	3	3.2(.90)	4	3.3(.71)	3
法律	3.1(.81)	3	3.3(.70)	3, 4	3.4(.76)	4
法ビジネス	3.2(.74)	3	3.1(.89)	4	3.3(.67)	3
全学	3.2(.76)	3	3.2(.80)	4	3.3(.72)	3, 4

Q10	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.70)	3, 4	3.3(.78)	4		
人間文化	3.2(.82)	3	3.2(.76)	3		
法律	3.4(.68)	4	3.4(.69)	4		
法ビジネス	3.3(.76)	3	3.1(.72)	3		
全学	3.3(.73)	4	3.3(.75)	4		

3.11 倫理観 (Q11)

平均値は、全学で3.4 [3.3, 3.4, 3.3, 3.2, 3.2, 3.2, 3.0] , 最頻値は4であり、学生は倫理観を概ね身につけたと認識していることがうかがえる (表 12)。前年度の全学平均 3.3 から 0.1 ポイント上昇し、2023 年度の 3.4 と同水準になった。学科別では、心臨と法律が 3.4、人文と法ビが 3.2 であり、最大 0.2 ポイントの差がみられた。前年度比では、法ビジネス学科が 0.2 ポイント低下した一方、全学では評価が上昇している。

表 12 Q11 に関する統計的代表的値

Q11	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.0(.90)	3	3.2(.81)	3	3.2(.82)	4
人間文化	3.1(.88)	3	3.1(.67)	3	3.1(.78)	3
法律	2.9(.83)	3	3.2(.62)	3	3.2(.76)	3
法ビジネス	3.0(.78)	3	3.3(.68)	3	3.1(.70)	3
全学	3.0(.85)	3	3.2(.73)	3	3.2(.78)	3

Q11	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.75)	4	3.2(.83)	4	3.3(.70)	3
人間文化	3.1(.81)	3	3.4(.71)	4	3.3(.70)	3
法律	3.2(.74)	3, 4	3.3(.69)	4	3.5(.55)	4
法ビジネス	3.3(.70)	3	3.1(.84)	3	3.4(.57)	3
全学	3.2(.76)	3	3.3(.77)	4	3.4(.66)	4

Q11	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.4(.70)	4	3.4(.69)	4		
人間文化	3.2(.83)	4	3.2(.71)	3		
法律	3.4(.70)	4	3.4(.78)	4		
法ビジネス	3.4(.63)	4	3.2(.68)	3		
全学	3.3(.72)	4	3.4(.72)	4		

3.12 地域社会の発展に貢献したいという気持ちや意識 (Q12)

平均値は、全学で 3.3 [3.3, 3.2, 3.1, 3.1, 3.2, 3.1, 3.0] , 最頻値は 4 であり、学生の地域貢献に対する意識は概ね身につけたと認識していることがうかがえる (表 13)。全学平均は前年度と同値で、2023 年度以降 3 年連続して 3.3 を維持している。学科別では、法律が 3.4 と最も高く、心臨と法ビが 3.3、人文が 3.2 であり、学科間の最大差は 0.2 ポイントであった。前年度比では、全体的に横ばいであり、全学的に安定している。

表 13 Q12 に関する統計的代表値

Q12	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	2.9(.87)	3	3.0(.93)	3	3.0(.89)	3
人間文化	3.1(.86)	3	3.0(.77)	3	3.2(.83)	3
法律	3.0(.79)	3	3.3(.72)	4	3.3(.77)	4
法ビジネス	3.1(.87)	3	3.2(.82)	3	3.3(.86)	4
全学	3.0(.84)	3	3.1(.85)	3	3.2(.84)	4

Q12	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.78)	3	3.1(.90)	3	3.1(.78)	3
人間文化	3.1(.81)	3	3.2(.85)	4	3.2(.87)	4
法律	3.2(.88)	4	3.2(.81)	4	3.4(.73)	4
法ビジネス	3.3(.70)	3	3.1(.89)	4	3.3(.76)	4
全学	3.1(.81)	3	3.1(.86)	4	3.2(.78)	4

Q12	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.75)	4	3.3(.77)	4		
人間文化	3.2(.88)	3, 4	3.2(.82)	3		
法律	3.4(.73)	4	3.4(.81)	4		
法ビジネス	3.3(.65)	3	3.3(.72)	4		
全学	3.3(.77)	3	3.3(.78)	4		

3.13 多様な言語・社会・文化に対する理解 (Q13)

この設問は、異文化理解、多文化共生と呼ばれる領域に関連するものである（表 14）。全学の平均値は 3.2 [3.2, 3.2, 3.1, 3.1, 3.0, 3.2, 2.9]，最頻値は 4 であり，学生は当該領域への理解を概ね身につけたと認識していることがうかがえる。全学平均は前年度と同値であり，2023 年度以降 3.2 を維持している。学科別では，人文が 3.5 と最も高く，心臨 3.1、法律 3.3，法ビ 3.0 で，最大 0.5 ポイントの特徴的な差がみられた。前年度比では人文が 0.1 ポイント上昇した一方，法ビは 0.3 ポイント低下した。

表 14 Q13 に関する統計的代表的値

Q13	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	2.8(.89)	3	3.1(.89)	4	2.9(.89)	2
人間文化	3.2(.83)	4	3.2(.74)	3	3.4(.68)	4
法律	3.0(.80)	3	3.2(.77)	3	3.0(.82)	3
法ビジネス	3.0(.81)	3	3.3(.79)	4	2.8(.92)	3
全学	2.9(.85)	3	3.2(.82)	3, 4	3.0(.86)	3

Q13	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.0(.72)	3	3.0(.85)	3	3.0(.82)	3
人間文化	3.1(.73)	3	3.4(.68)	4	3.3(.72)	4
法律	3.1(.82)	3	3.1(.77)	3	3.2(.80)	4
法ビジネス	3.0(.92)	3	3.0(.78)	3	3.3(.71)	4
全学	3.1(.77)	3	3.1(.80)	3	3.2(.79)	4

Q13	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
学科	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.78)	3	3.1(.84)	3		
人間文化	3.4(.74)	4	3.5(.69)	4		
法律	3.2(.79)	3	3.3(.76)	4		
法ビジネス	3.3(.68)	4	3.0(.74)	3		
全学	3.2(.77)	3	3.2(.79)	4		

3.14 多様な人々と共生・協働できる素地（国際人として活躍する素地）

この設問は、いわゆるグローバル人材育成に関連するものである（表 15）。全学の平均値は 3.3[3.3, 2.8, 2.7, 2.7, 2.6, 2.8, 2.6] で、最頻値は 4 であり、学生は当該能力を概ね身につけたと認識していることがうかがえる。全学平均は前年度と同値で、標準偏差も 0.72 と変化がなく、全体的に安定した結果となった。調査開始以降、2024 調査で初めて 3 点台となり 2 年連続で同水準を維持した。2023 年度 DP 改正を受け、2024 調査から Q14 は「国際人として活躍する素地」から「多様な人々と共生・協働できる素地」に変更したことも影響しているものと考えられる。多様な人々との共生・協働という意識の方が、以前の DP よりも身に付いたと実感しやすいものだったことがうかがえる。学科別では、心臨、人文、法律が 3.4、法ビが 3.2 で、最大 0.2 ポイントの差がみられた。前年度比では人間文化学科が 0.2 ポイント、心臨が 0.1 ポイント上昇した一方、法ビは 0.1 ポイント低下した。

表 15 Q14 に関する統計的代表的値

学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	2.4(1.03)	2	2.5(.99)	2	2.5(.96)	2
人間文化	2.9(.95)	3	2.8(.78)	3	2.9(.89)	3
法律	2.6(.99)	2	2.9(.90)	3	2.7(.94)	2
法ビジネス	2.7(.85)	3	3.0(.78)	3	2.6(.89)	3
全学	2.6(.99)	3	2.8(.93)	3	2.6(.94)	3, 4

学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	2.7(.85)	2	2.6(.96)	2	2.5(.84)	2
人間文化	2.8(.94)	3	3.1(.96)	4	2.9(.87)	2, 3
法律	2.7(.92)	2, 3	2.7(.93)	3	3.1(.94)	4
法ビジネス	2.7(1.01)	3	2.8(.93)	2	3.1(.90)	3
全学	2.7(.90)	3	2.7(.96)	2	2.8(.92)	3

学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.70)	4	3.4(.71)	4		
人間文化	3.2(.79)	3	3.4(.72)	4		
法律	3.4(.71)	4	3.4(.76)	4		
法ビジネス	3.3(.69)	4	3.2(.68)	3		
全学	3.3(.72)	4	3.3(.72)	4		

4. まとめ

4.1 設問項目ごとの結果のまとめ

本調査を通じて、DPに掲げる教育達成目標について、卒業生が大学4年間の学修成果をどのように受け止めているかを、一定程度明らかにすることができた。2025 調査におけるすべての回答の平均値は3.24であり、前年度の3.27からわずかに低下したものの、学生は全体として本学が目標とする資質・能力を概ね身につけたと認識していることがうかがえる。14 設問中、Q8を除く13 設問の全学平均は3.0～3.4の範囲にあり、そのうち9 設問で全学平均が3.3以上となった。

全学平均が3.4と最も高かった設問は、「個性的かつ堅実な人間性、自主性、創造性 (Q1)」「自ら学ぶ姿勢 (Q6)」「専門知識や技能 (Q7)」「倫理観 (Q11)」の4 設問であった。このうち、Q6とQ11は前年度から0.1ポイント上昇し、Q1とQ7は前年度の高い水準を維持した。特にQ1は、2018 調査の3.0から段階的に上昇しており、DP2～DP6の達成を束ねてDP1の実現を目指す本学の教育課程において、学生の総合的な成長実感が比較的高く示されたものと受け止められる。2024 調査でも今後の推移に注目された項目であった。また、Q7の高い評価からは、各学科の専門教育についても、全学的には一定の成果が認識されていることがうかがえる。

全学平均3.3の設問は、「コミュニケーション能力 (Q5)」「職業観 (Q9)」「生涯学習能力 (Q10)」「地域貢献意識 (Q12)」「多様な人々との共生・協働 (Q14)」であった。これらは最頻値もすべて4であり、学生の獲得実感が比較的高い観点と判断できる。Q5、Q9、Q10、Q12は、過去の調査でも平均値が比較的高い設問として繰り返し現れており、対話・協働、将来の職業、生涯にわたる学習、地域社会への貢献といった観点は、本学教育の成果として比較的安定して認識されている。Q14についても、2024 調査から変更された設問内容の下で2年連続して3.3を維持しており、「多様な人々と共生・協働できる素地」に対する学生の獲得実感が概ね定着していると考えられる。

「人類の文化、社会と自然に関する教養 (Q2)」「科学的・論理的思考力 (Q3)」「多様な言語・社会・文化に対する理解 (Q13)」の全学平均は、いずれも3.2であった。これらについても学生は概ね身につけたと認識しているが、全学平均3.3以上の設問群と比べると、獲得実感はやや低い。Q3では全学の最頻値が前年度の4から3へ変化しており、平均値は横ばいであっても、回答の中心が変化している点に留意する必要がある。一方、Q13の全学最頻値は前年度の3から4へ変化しており、全学平均に変化はないものの、高い評価を選択した学生が増えた可能性がある。

「コンピュータの操作方法や情報技術 (Q4)」の全学平均は3.0、最頻値は3であり、前年度から0.1ポイント低下した。Q4は2018 調査以降2.9～3.1の範囲で推移しており、持続的な上昇傾向は確認できない。情報技術は専門分野を問わず必要となる汎用的能力であるため、各学科の授業や演習におけるICTの活用機会、学生が実際に行う情報の収集・分析・発信、データ処理等の学修経験との関連を確認する必要がある。2023 年度から導入されたSociety5.0 基礎プログラム等の成果は、主な対象学生が卒業する2026 年度以降の調査において継続的に検証することが求められる。

今回、最も注視すべき結果は、「総合的な問題発見能力や課題を解決する能力 (Q8)」である。Q8の全学平均は前年度の3.2から2.7へ0.5ポイント低下し、最頻値も3から2へ変化した。さらに、全学の標準偏差は0.72から0.98へ拡大しており、平均値の低下だけでなく、学生間の獲得実感の差も大きくなっている。学科別にみても、すべての学科で前年度から低下しているため、特定学科のみの課題ではなく、全学的に検証すべき結果である。ただし、他の13 設問がおおむね前年度と同水準である中で、Q8だけが大幅に低下していることから、実際の教育成果の変化に加え、当該年度の回答者構成、設問の受け止め方、回答時の状況等が影響した可能性も含め、慎重な検証が必要である。

設問ごとの学科間差については、前年度は最大0.2ポイントであったが、2025 調査では最大0.5ポイントとなり、学科別の特徴が再び明瞭になった。学科間差が0.3ポイント以上となった設問は、「専門知識や技能 (Q7)」の0.4、「問題発見・解決能力 (Q8)」の約0.4、「職業観 (Q9)」の0.3、「生涯学習能力 (Q10)」の0.3、「多様な言語・社会・文化に対する理解 (Q13)」の0.5であった。一方、「DP1 (Q1)」「教養 (Q2)」「情報技術 (Q4)」「コミュ

コミュニケーション能力（Q5）」では、学科間差が0.1ポイントにとどまり、比較的全学に共通した評価となっている。

以上から2025調査では、DP1、自ら学ぶ姿勢、専門知識・技能、職業観、生涯学習、倫理観、地域貢献及び共生・協働について、全学的に比較的高い獲得実感が示された。一方、情報技術は継続的な課題であり、問題発見・解決能力については今年度に顕著な低下がみられた。

4.2 学科平均値の比較による各学科の特色

2025調査における各学科の特色は、次の通りである。

（心理臨床学科）

心理臨床学科では、「専門知識や技能（Q7）」が3.5で、4学科中最も高かった。Q7は前年度から0.1ポイント上昇し、標準偏差も0.63と比較的小さいことから、専門教育に対する獲得実感が学科内で比較的に広く共有されていると考えられる。また、「DP1（Q1）」「自ら学ぶ姿勢（Q6）」「倫理観（Q11）」「多様な人々との共生・協働（Q14）」はいずれも3.4であり、最頻値も4であった。専門知識に加え、主体的な学び、倫理観及び共生・協働に関する評価が比較的に高い点が特徴である。

一方、「問題発見・解決能力（Q8）」は前年度の3.2から2.7へ0.5ポイント低下し、最頻値も2となった。また、「情報技術（Q4）」は3.2から3.0へ0.2ポイント低下している。心理臨床学科では各専門職に関連した講義も多数実施されていることから、それらの経験が試験対策など専門知識の獲得だけでなく、問題の発見、情報の活用、解決過程の説明という能力が身に付いたと実感できるものになっているかを確認していくことも重要と思われる。

（人間文化学科）

人間文化学科では、「多様な言語・社会・文化に対する理解（Q13）」が3.5で、全学科中最も高かった。前年度の3.4からさらに0.1ポイント上昇しており、学科の教育内容と対応する明確な特色が継続して示されている。また、「コミュニケーション能力（Q5）」は前年度の3.2から3.4へ0.2ポイント上昇し、「多様な人々との共生・協働（Q14）」も3.2から3.4へ0.2ポイント上昇した。異文化理解にとどまらず、対話や共生・協働に関する学生の獲得実感が高まっている点が特徴である。

一方、「問題発見・解決能力（Q8）」は前年度の3.3から2.6へ0.7ポイント低下し、4学科の中で最も低い値となった。また、「科学的・論理的思考力（Q3）」は3.1、「情報技術（Q4）」は3.0であり、相対的には高くない。人間文化学科の強みである言語・文化理解やコミュニケーションの学修が、情報の分析、根拠に基づく考察、課題設定及び問題解決能力にも良い影響があったと感じることができるような講義の在り方も検討の必要性があるかもしれない。

（法律学科）

法律学科では、14設問中13設問で平均値が3.1以上となり、「自ら学ぶ姿勢（Q6）」と「職業観（Q9）」が3.5、「コミュニケーション能力（Q5）」「専門知識や技能（Q7）」「生涯学習能力（Q10）」「倫理観（Q11）」「地域貢献意識（Q12）」「多様な人々との共生・協働（Q14）」が3.4であった。特にQ6は前年度の3.2から3.5へ0.3ポイント上昇しており、主体的に学ぶ姿勢について高い獲得実感が示された。また、職業観、生涯学習、地域貢献等の評価も高く、専門教育と卒業後の社会生活や職業との接続を意識していることがうかがえる。

「問題発見・解決能力（Q8）」は2.97と約3.0で、前年度から約0.3ポイント低下したものの、4学科の中では最も高かった。ただし、標準偏差は1.03と全学科・全設問の中でも大きく、学生による評価が分かれている。法律学科では、事例の検討、論点の抽出、根拠に基づく判断等の学修機会と、学生が設問のいう問題発見・解決能力をどのように関係づけて捉えているかを確認する必要がある。

（法ビジネス学科）

法ビジネス学科では、「職業観（Q9）」が3.4と高く、「DP1（Q1）」「コミュニケーション能力（Q5）」「自ら学ぶ姿勢（Q6）」「地域貢献意識（Q12）」はいずれも3.3であった。職業や勤労の意味、地域社会への貢献、コミュニケーション等、社会との接続に関わる観点について

は、比較的高い獲得実感が示されている。とりわけ、職業観が継続して高いことは、学科の教育内容やキャリア形成に関する学修経験との関連が考えられる。

一方、「専門知識や技能（Q7）」は前年度の3.3から3.1へ、「生涯学習能力（Q10）」は3.3から3.1へ、「倫理観（Q11）」は3.4から3.2へ、それぞれ0.2ポイント低下した。「多様な言語・社会・文化に対する理解（Q13）」も3.3から3.0へ0.3ポイント低下し、「多様な人々との共生・協働（Q14）」も3.2となった。また、Q7の標準偏差は0.79であり、専門知識・技能の獲得実感には幅がみられる。専門科目の履修状況、演習、資格取得支援、キャリア教育等との関連を確認し、専門性と職業観、生涯学習、多様性理解を相互に結びつける教育上の工夫が求められる。

（全学）

全学では、全回答の平均値が3.24であり、前年度の3.27と概ね同水準を維持した。14設問のうち、前年度から上昇したのは「自ら学ぶ姿勢（Q6）」と「倫理観（Q11）」、低下したのは「情報技術（Q4）」及び「問題発見・解決能力（Q8）」であり、その他の10設問は前年度と同値であった。したがって、全体としては安定した結果であるが、Q8の0.5ポイント低下が今年度の全体傾向に大きく影響していると判断できる。

前年度は全設問の学科間差が最大0.2ポイントに収まり、学科間の均質化が特徴であったが、今回はQ7、Q8、Q9、Q10及びQ13で0.3ポイント以上の差がみられた。特に、人間文化学科の多文化理解、心理臨床学科の専門知識・技能、法律学科の主体的学修及び職業観、法ビジネス学科の職業観という各学科の特徴が確認された。各学科の特徴が見えた一方で、問題発見・解決能力の獲得実感が例年より低かった。各学科の持つ特徴を学生に提供しながらも、自分自身で問題解決する力を養うことの課題と難しさが示されたと考えられる。

4.3 DP項目ごとの受け止め方

各設問を6つのDPカテゴリーに対応させてみると、DP1に対応するQ1の全学平均は3.4、最頻値は4であり、学生の獲得実感が高い。DP1は、個性的かつ堅実な人間性、自主性、創造性を掲げる本学の建学の精神と直接関係する。DP1に明示的に対応する個別科目ではなく、DP2～DP6の達成を総合することによってDP1の実現を図る教育課程の構造を踏まえると、この結果は、4年間の学修を通じた総合的な成長を学生自身が概ね認識していることを示している。

DP2に対応するQ2～Q6では、全学平均が3.0～3.4に分布した。「自ら学ぶ姿勢（Q6）」が3.4、「コミュニケーション能力（Q5）」が3.3と高い一方、「情報技術（Q4）」は3.0にとどまった。「教養（Q2）」及び「科学的・論理的思考力（Q3）」は3.2であり、DP2全体としては概ね身についたと認識されているものの、構成する能力間で獲得実感に差がある。特に情報技術については、全学的な教育プログラム及び各専門科目における活用との接続を継続的に確認する必要がある。

DP3に対応するQ7とQ8では、「専門知識や技能（Q7）」が3.4である一方、「問題発見・解決能力（Q8）」は2.7であり、同一DP内で0.7ポイントの大きな差が生じた。学生は専門知識・技能の獲得を高く評価しているものの、それらを用いて問題を発見し、課題を設定し、解決へ結びつける総合的な能力については、十分な獲得実感を得られていない可能性がある。知識・技能の修得と、その活用を一連の学修成果として学生が認識できるよう、演習、実習、ゼミ及び卒業研究等における課題解決の過程を明示することが重要と考えられる。

DP4に対応する「職業観（Q9）」と「生涯学習能力（Q10）」はいずれも全学平均3.3、最頻値4であった。DP4は過去の調査でも比較的高い獲得実感が示されており、2025調査でも安定した結果となった。キャリア教育、専門教育、実習、資格取得支援等を通じて、卒業後の職業生活と継続的な学習を考える基盤が一定程度形成されていると受け止められる。ただし、学科間差がQ9とQ10の双方で0.3ポイントあるため、専門職を養成する教育の特徴や進路特性の違いなど各学科の特徴による差も考えられる。

DP5に対応する「倫理観（Q11）」は3.4、「地域貢献意識（Q12）」は3.3であり、いずれも最頻値は4であった。倫理観は前年度から0.1ポイント上昇し、地域貢献意識は3年連続して3.3を維持している。したがって、倫理観を持った市民として地域社会へ貢献するというDP5については、学生に比較的高い獲得実感が形成されていると考えられる。学部基礎科目、専門

教育、地域連携活動、実習等が複合的に関連している可能性があり、教員の工夫や努力による講義内容の充実などが寄与している可能性がある。

DP6に対応する「多様な言語・社会・文化に対する理解（Q13）」は3.2、「多様な人々との共生・協働（Q14）」は3.3であり、いずれも全学最頻値は4であった。DP6全体としては概ね肯定的に受け止められている。ただし、Q13では学科間差が0.5ポイントあり、DP6の獲得実感には各学科の教育内容が反映されている可能性があり、特に人間文化学科の得点が高いことは学科の提供している内容を学生が受け止めた結果とも考えられる。また、Q14は2024調査から設問内容が変更されているため、2023調査以前との単純な数値比較はできない。今後も継続して安定性を確認する必要がある。

以上を総合すると、DP1、DP4及びDP5では比較的高く安定した獲得実感が示され、DP2及びDP6も概ね肯定的に受け止められている。一方、DP3は専門知識・技能に対する高い評価と問題発見・解決能力に対する低い評価が併存しており、2025調査で最も重点的に検証すべきDPカテゴリーである。

4.4 本学の個性・特色の反映等

以上の結果から、本学が個性・特色として重視している「学生の社会参画意識を育む大学」「地域とともに歩む大学」については「職業観（Q9）」「地域貢献意識（Q12）」及び「多様な人々との共生・協働（Q14）」の全学平均がいずれも3.3、最頻値が4であったことから、学生の獲得実感に一定程度反映されていると評価できる。また、「倫理観（Q11）」は3.4で、前年度から上昇しており、コンプライアンスや誠実性を重視する市民性の形成についても比較的高い成果認識が示された。

本学の建学の精神に直接関係する「個性的かつ堅実な人間性、自主性、創造性（Q1）」は3.4、最頻値4であり、2018調査以降の上昇を経て高い水準を維持している。「自ら学ぶ姿勢（Q6）」も3.4に上昇していることから、単なる知識の修得にとどまらず、自主性や継続的な学びに関わる教育目標について、学生が一定の成長を認識していることがうかがえる。これらは、「人間力教育」を重視する本学の教育的特色が、学生の自己評価に表れているものと考えられる。

汎用的能力については、「コミュニケーション能力（Q5）」及び「科学的・論理的思考力（Q3）」は概ね身についたと認識されている。一方、「情報技術（Q4）」は3.0にとどまり、「問題発見・解決能力（Q8）」は2.7へ大きく低下した。したがって、知識や技能を修得する教育の成果は比較的明確であるものの、情報を活用しながら自ら問題を設定し、解決へ結びつける統合的・実践的能力については、学生が成果を実感し難かった可能性がある。今後も検証する必要がある。

特に、専門知識・技能に関するQ7が3.4である一方、その活用に関わるQ8が2.7であるという結果は重要である。授業、演習、実習、ゼミ、卒業研究等で実際に行っている問題発見・解決の活動をDP及び授業科目の到達目標と明確に結びつけ、学生が学修過程を振り返る機会を設けることが求められる。

5. 結語

本調査は、大学4年間の学びを通じた卒業時の「成長実感」及び「能力獲得実感」を把握するものである。2025年度卒業生は、2018年度入学生から適用された教育課程の下で学んだ新カリキュラム5期生に当たる。2025調査では、全回答の平均値は3.24で、前年度の3.27と概ね同水準にあり、14設問中13設問の全学平均が3.0以上であった。建学の精神に関係するDP1、自ら学ぶ姿勢、専門知識・技能、職業観、生涯学習、倫理観、地域貢献及び共生・協働等については、学生が概ね肯定的な獲得実感を持っていることが確認された。

その中でも、建学の精神に関係するQ1が3.4の高い水準を維持し、倫理観に関するQ11が3.4へ上昇したことは、本学が教育課程を通じて重視してきた人間性、市民性及び倫理性の形成という観点から重要である。また、職業観、生涯学習能力及び地域貢献意識も比較的高い水準を維持しており、学生が大学での学びと卒業後の社会生活とのつながりを一定程度認識していることがうかがえる。

一方、2025調査では問題発見・解決能力に関するQ8が前年度の3.2から2.7へ大きく低下し、最頻値も2、標準偏差も0.98となった。この変化は全学科で確認されており、今回の調査

結果における最も重要な検証課題である。専門知識・技能の獲得実感が高いことを踏まえると、知識・技能そのものの修得と、それらを総合的に活用して問題を発見・解決する能力との間に、学生の認識上の隔たりが生じている可能性がある。専門的な資格の合格を目標とする学びや就職試験対策などに力を入れることと、自ら課題を見つけ解決する力を同時に学べる機会を提供することは難しいと思われる。その中で、どのようなことができるかを今後も検討する必要がある。

学科間比較では、前年度に縮小していた学科間差が、2025 調査では一部の設問で再び明瞭になった。心理臨床学科では専門知識・技能、人間文化学科では多様な言語・社会・文化への理解、法律学科では自ら学ぶ姿勢や職業観、法ビジネス学科では職業観にそれぞれ比較的高い獲得実感が示された。これらは各学科の教育内容や学修経験との関連が考えられる一方、学科によって低下した設問も異なるため、全学的な傾向と学科固有の傾向を区別した検証が求められる。ただし、各学科が特徴ある教育を目指した結果とも考えられるため、今回の結果も参考にしながら、改善点があれば工夫していくと更なる特徴ある教育に寄与できるのではないかと。

今回の回答率は93%で、前年度の98%から低下したものの、調査結果の全体傾向を把握する上では高い水準を確保している。ただし、ユニパによる回答割合は69%へ低下し、紙による回答が20%へ増加した。また、無回答者は21名であった。ユニパへのアクセスも低下している可能性がある。学生とのコンタクトの取り方も一つの課題と考えられる。今後も高い回答率を維持しながら、回答方法や回答時期の違いが結果に影響していないかを確認するとともに、学生が回答しやすい調査実施方法を検討する必要がある。

2023 年度入学生から適用された新たな教育課程では、共通教育と専門教育の接続性の強化、教養基礎科目群の設置、Society5.0 基礎プログラムの導入等が行われている。その完成年度に当たる2026 年度卒業生以降の調査では、教養、情報技術、科学的・論理的思考力及び問題発見・解決能力等にこれらの教育改革の成果がどのように表れるかを重点的に確認する必要がある。

卒業時アンケートは学生自身の認識に基づく間接評価であり、これだけでDP の達成を断定することはできない。しかし、学生が4 年間の学修成果をどのように意味づけ、どの能力について成長を実感しているかを把握する上では重要な資料である。今後も設問の継続性を確保し、直接評価、授業アンケート、学修行動、卒業研究、資格取得、進路等のデータと組み合わせながら、本学の教育成果及び課題を多面的に検証し、教育改善と内部質保証に活用していく必要がある。

最後に、2025 調査に回答した卒業生及び調査の実施と回答率の確保に協力した関係各所に記して謝意を表したい。

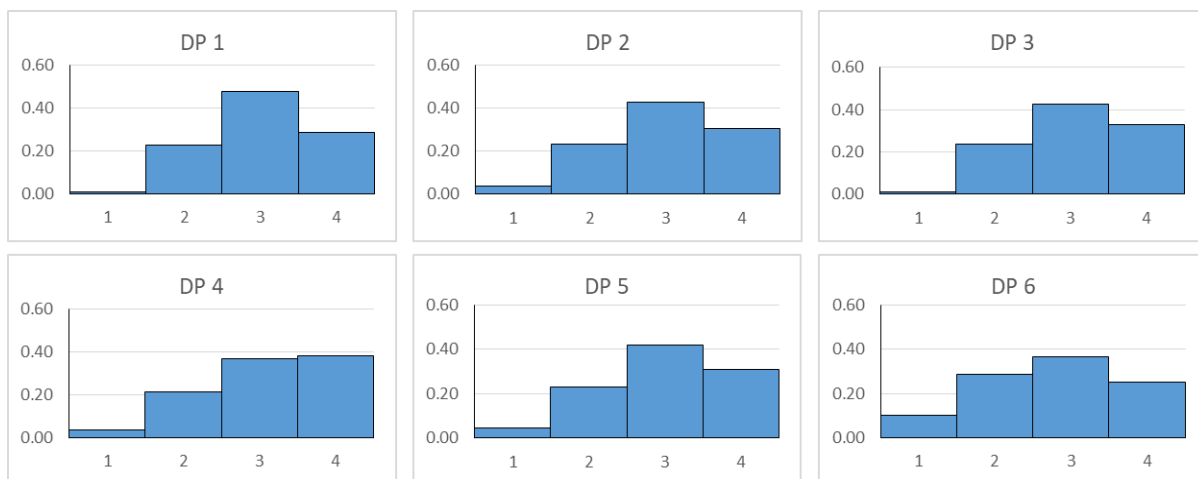


図 1 [2018 調査]

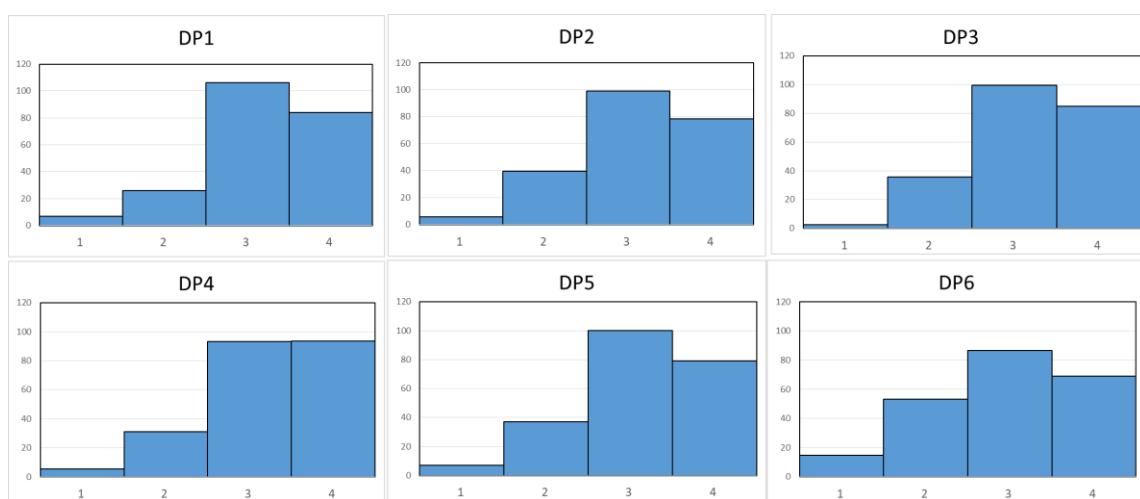


図 2 [2019 調査]

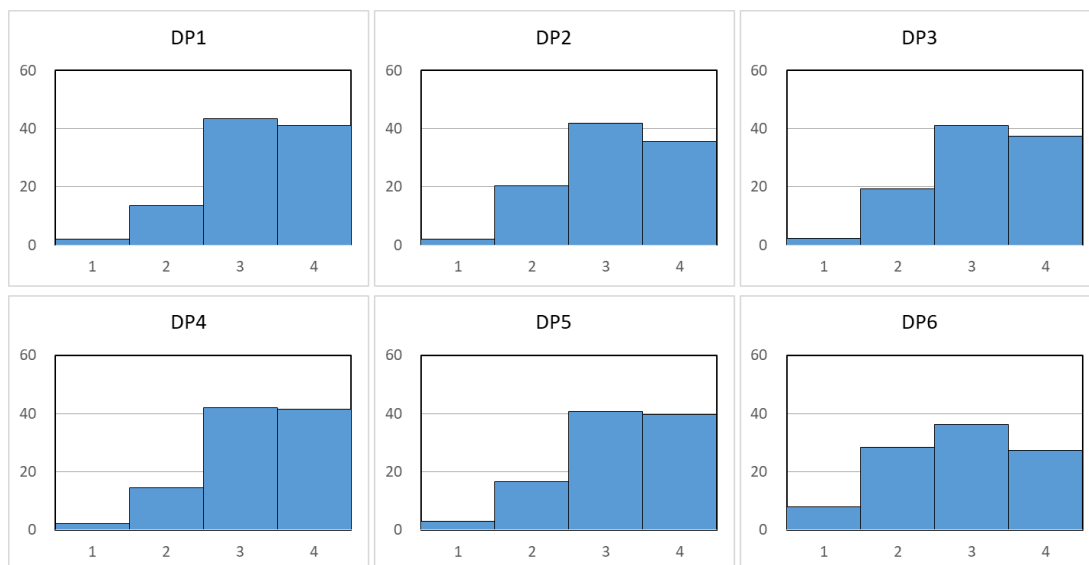


図 3 [2020 調査]

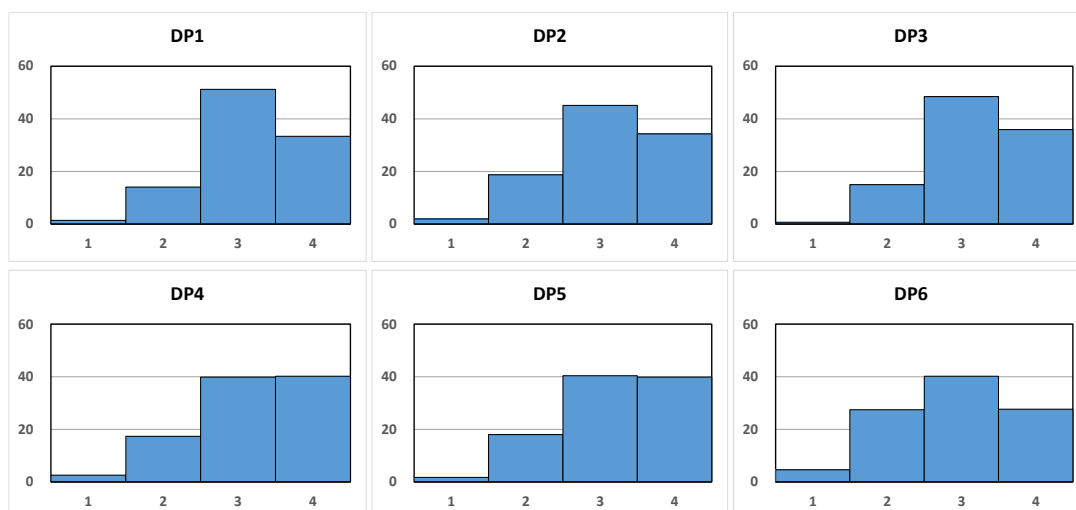


図4 [2021 調査]

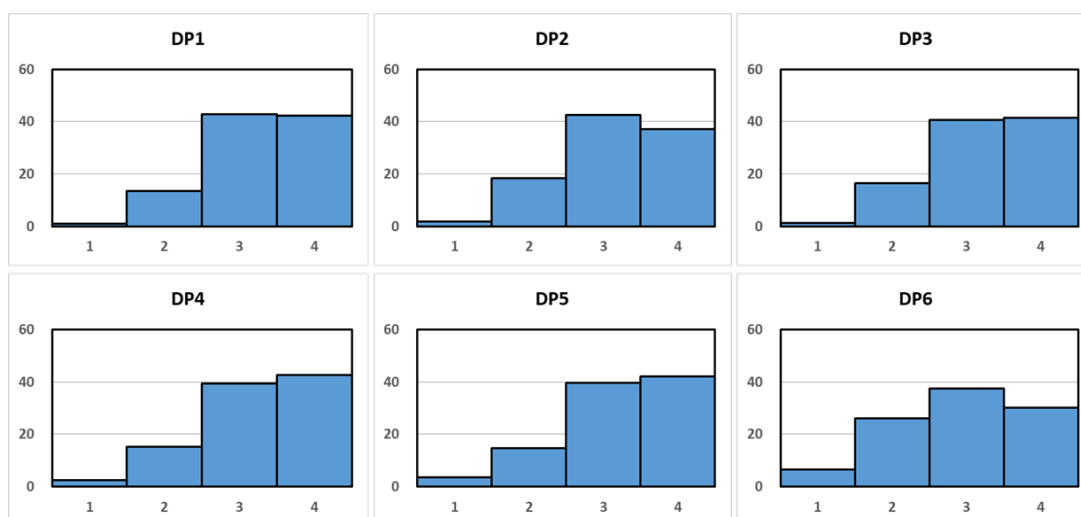


図5 [2022 調査]

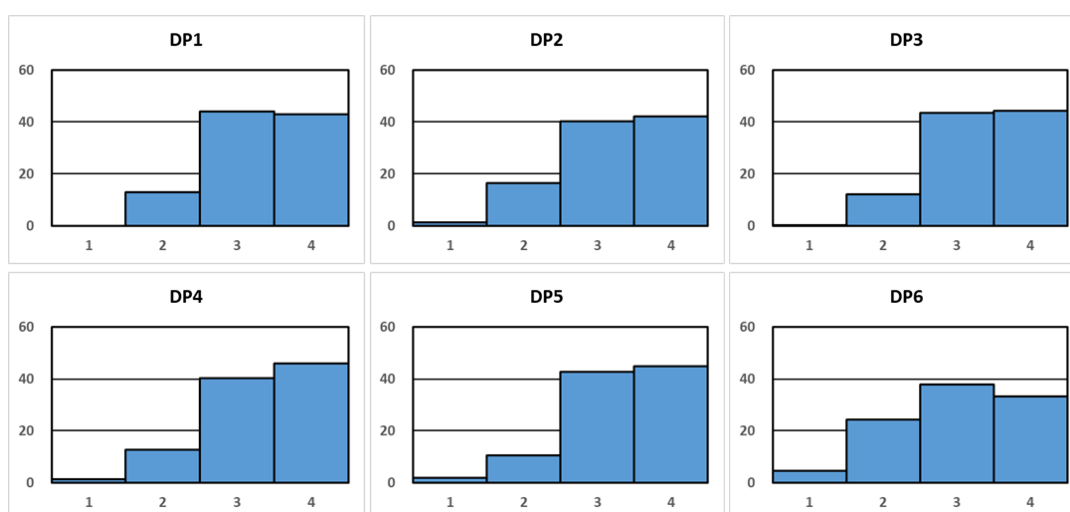


図6 [2023 調査]

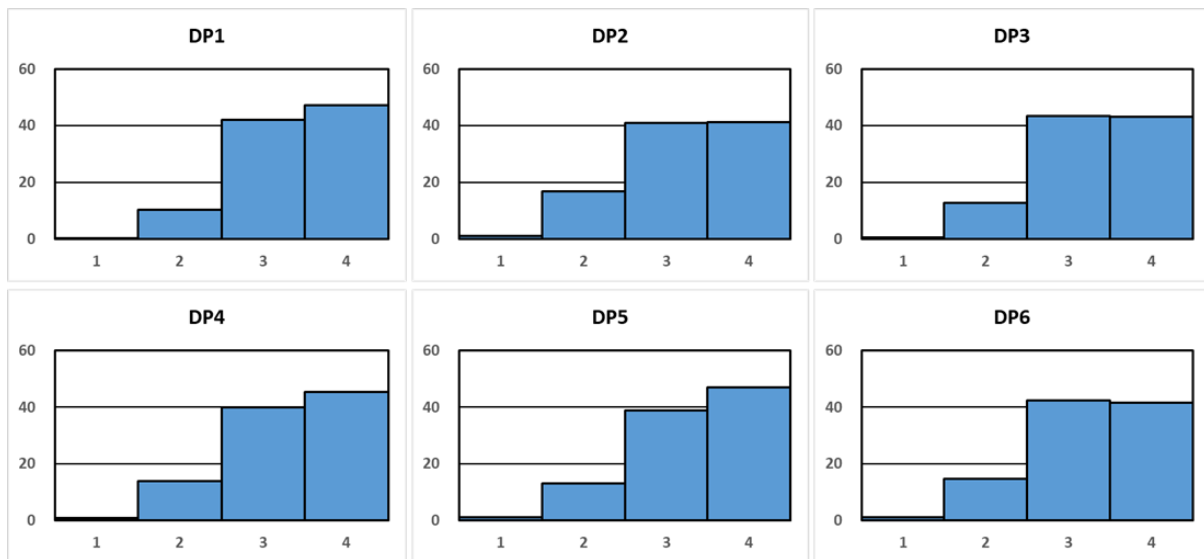


図 7 [2024 調査]

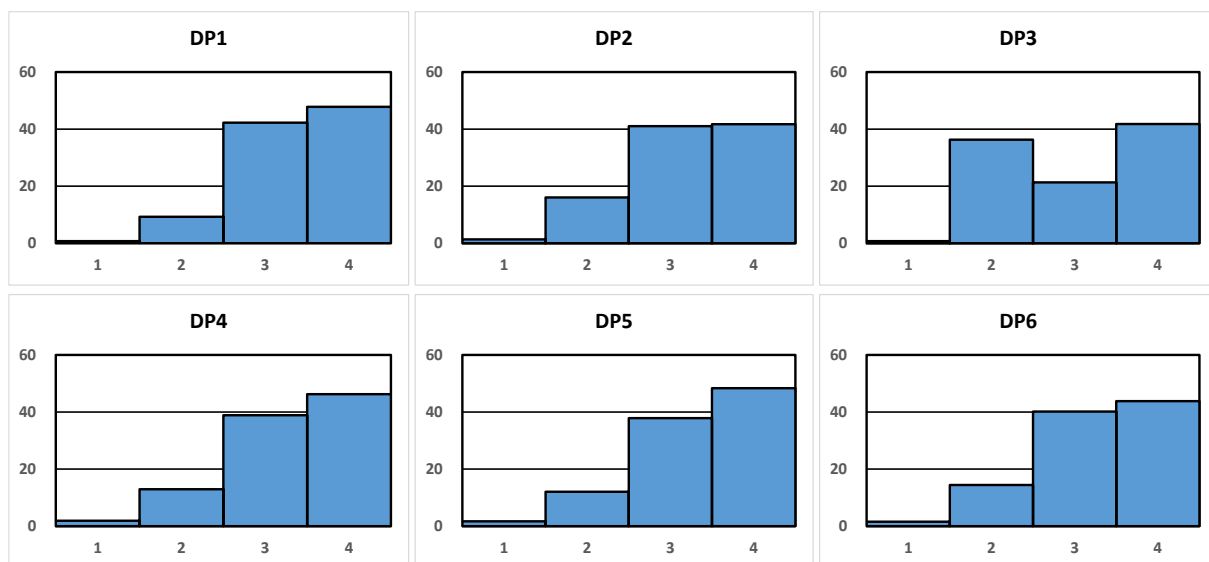


図 8 [2025 調査]

【付録】

志學館大学のディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）（2022 年度まで）

本学は建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」に従い、その教育目標を実現することを目指し、以下に掲げる資質・能力を修得した者に学士の学位を授与します。

- 1 個性的かつ堅実な人間性，自主性，創造性が身についている。
- 2 人類の文化，社会と自然に関する豊かな教養と科学的・論理的思考法，情報処理技術，コミュニケーション能力を身につけ，自ら学ぶことの喜びを知っている。
- 3 実践的で体系的な専門的知識と技能を身につけ，総合的な問題発見・課題解決能力を持っている。
- 4 職業観を持ち生涯学習し続ける能力を有している。
- 5 倫理観を持った市民として地域社会の発展に貢献する高い意識を持っている。
- 6 多様な言語・社会・文化を理解し，国際人として活躍する素地を持っている。

志學館大学のディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）（2023 年度改定）

本学は建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」に従い、その教育目標を実現することを目指し、以下に掲げる資質・能力を修得した者に学士の学位を授与します。

- 1 個性的かつ堅実な人間性，自主性，創造性が身についている。
- 2 人類の文化，社会と自然に関する豊かな教養と科学的・論理的思考法，情報技術，コミュニケーション能力を身につけ，自ら学ぶことの喜びを知っている。
- 3 実践的で体系的な専門的知識と技能を身につけ，総合的な問題発見・課題解決能力を持っている。
- 4 職業観を持ち生涯を通じて学習し続ける能力を有している。
- 5 倫理観を持った市民として地域社会の発展に貢献する高い意識を持っている。
- 6 世界の言語・社会・文化を理解すると共に，多様な人々と共生・協働できる素地を持っている。

2023 年度 DP 改定に伴い 2024 調査から適用される設問

- | | |
|-----|-----------------------------|
| DP1 | Q1. 個性的かつ堅実な人間性，自主性，創造性 |
| DP2 | Q2. 人類の文化，社会と自然に関する教養 |
| | Q3. 物事を科学的に，論理的に考える方法や力 |
| | Q4. コンピュータの操作方法や情報技術 |
| | Q5. コミュニケーションの能力 |
| | Q6. 自ら学ぶことが楽しく，喜びであると感じる姿勢 |
| DP3 | Q7. 専門分野や所属する学科の専門知識や技能 |
| | Q8. 総合的な問題発見能力や課題を解決する能力 |
| DP4 | Q9. 仕事や働くことの意味についての自分自身の考え |
| | Q10. 生涯にわたって学習を続けていく意思や力 |
| DP5 | Q11. 倫理観 |
| | Q12. 地域社会の発展に貢献したいという気持ちや意識 |
| DP6 | Q13. 多様な言語・社会・文化に対する理解 |
| | Q14. 多様な人々と共生・協働できる素地 |

主たるカリキュラム改編，各種制度の導入歴

適用	卒業初年度	概要
2018 年度	2021 年度	専門教育科目の再体制化 ・4 学科とも専門教育科目に「学部基礎科目」群を置き「哲学」「倫理学」等を配置。その中に人間関係学部では，法学，政治学，社会学等を，法学部では「入門科目」群として各法入門科目と経営学科目を配置。
2020 年度	(遡及) 2023 年度	ESD プログラム導入 法学部学科分属制度導入
2023 年度	2026 年度 (遡及)	共通教育と専門教育の接続性の強化 ・卒業要件単位数の 3 部構成化。 ・共通教育に「導入科目」群，教養科目に「教養基礎科目」群の設置。 Society5.0 基礎プログラム導入
2024 年度	(遡及)	教養基礎科目群に「ファイナンシャルリテラシー」配置。
2025 年度	2028 年度	人文学科及び法学部の新コース設置に伴う学科科目の整理。